

【報告】

学部教育における国際看護学実習の展開

— タイ王国での活動を中心に —

佐山 理絵 高木 廣文

要 旨 国際化に対応できる看護職の養成が求められる中、本学では2006年度に国際保健看護学研究室が設置され、学部教育での国際看護学教育を積極的に展開している。ここでは、4年生に選択実習として開講している「国際看護学実習」について、2007年度にタイ王国で実施した内容を振り返り、各実習施設での学びについて検討した。

実習国や施設は、国際保健看護学を卒業研究に選択した学生の研究課題をもとに選定し、HIV/AIDSの感染者が多く報告され、活発に保健医療施策や事業が行われているタイ王国北部を主な地域とした。大学や病院、デイケアセンターなど様々な施設を訪れ、活動する人々とディスカッションをすることで、タイ王国の保健医療看護の現状を知り、異文化理解を体験的に学ぶ機会を多くもった。国際看護学で重要となる異文化理解を奨めるためにも、語学や文化に関する事前学習にも重点をおいて取り組むことが必要である。

キーワード：国際看護学実習、学部教育、タイ王国、HIV/AIDS

I. 序 文

グローバル化が進む現代、看護職を取り巻く状況にも国際化の波が大きく押し寄せている。開発途上国における支援や、災害時の国際救援活動など国境を越えて活動する日本の看護職も多い。さらに日本においても2007年8月20日に両国首脳によって署名された、看護・介護分野の労働者の受入れを含む日・インドネシア経済連携協定を受け¹⁾、2008年8月7日にインドネシアからの一団が来訪した。今後はフィリピンからの受入れも予定されており、日本で働く看護職の現場に、様々な国籍の同僚が加わる日は遠くない。こうした国際化に対応できる看護職の養成は急務であり、これからの看護職を育てる看護基礎教育において、「国際化に対応できる」と

いう視点は必要不可欠である。

またこうした国際化に呼応するように、国際保健・看護の実践者として活動する看護職を志望し、看護大学へ入学する学生も多く見られる。学生は、開発途上国での看護活動や米国等の先進国での看護職従事などを目標としていることが多く、在学中より、語学力の向上に努め、海外で実施されるスタディツアーに参加して実際の現場に触れる機会を得るなど、目標に向けて闊達にかつ具体的に活動している様子も見られる。

大学における看護教育においても国際看護学教育の機会は広がっている。本学では、2006年度から医学部看護学科に国際保健看護学研究室が設置され、2006年度に教授1名、2007年度に助教が1名着任し、国際保健・国際看護学を専任で担当している。教育内容は、学部2年生に必修科目として

「国際看護学Ⅰ（2単位）」を開講している。「国際看護学Ⅰ」では、国際看護学の礎となる国際保健学を概説し、学問的な背景を理解することや、災害看護や母子保健・リプロダクティブヘルス、国際機関の活動などの各論を通して、実際の国際看護活動を総合的に学ぶことを目的としている。さらに、学部4年生を対象に、選択実習として、国際協力の概念と方法、難民援助、災害援助、在日外国人の健康と保健医療福祉など、選択する学生の志向する課題を実践的に学ぶことを目的とし、「国際看護学Ⅱ（2単位）」及び「国際看護学実習（2単位）」（以下、この2科目をまとめて「国際看護学実習」と略す）を開講している。主に、卒業研究のテーマとして国際保健看護学を選択した学生がその研究遂行のため、フィールドワークとして実習に参加するという関連であるが、国際看護学を卒業研究に選択しない学生が、選択実習の一つとして「国際看護学実習」を選択することも可能である。

国際看護学の教授方法や内容は、各教員の海外活動経験などが大きく反映される現状があるが、看護系大学・短大が国際化を掲げカリキュラムを組むに当たっては、その目標を達成し得る関連科目・時間数を吟味するなどの科目設置の工夫が必要である²⁾。2007年度、タイ王国において実施した国際看護学実習を振り返り、学部教育における国際看護学実習の展開について検討する。

Ⅱ. 実習内容

1. 科目概要と学習目標

1) 「国際看護学Ⅱ」

国際看護学の概念と方法、難民援助、災害援助、在日外国人の健康と保健医療福祉など、国際看護学の必要性を更に追求し、実践的な学習や研究を行いたいと希望する学生を対象にゼミナール形式での学習を行う。途上国の健康問題を中心に学習するが、学習内容の詳細については、選択する学生との検討の上で決定する。なお、国際看護学実習と関連させて授業が進行すると共に、卒業研究との関連も考慮される。

2) 「国際看護学実習」

国際看護学Ⅱの授業と関連させ、選択する学生の志向する課題を実践的に学ぶ。具体的な内容は、国外での実習・実践あるいは文献学習など、学生と検討のうえで決定する。ただし、東南アジアで実施されるスタディツアーへの参加が実習の基本であり、卒業研究との関連も考慮してその詳細を決定する。

2. 実習学生

国際看護学実習は選択実習として学部4年生に開講している。2007年度の国際看護学実習選択学生は、卒業研究で国際保健看護学を選択する4名とその他3名の計7名だった。

3. 事前学習

卒業研究選択学生は、3年次より週に2時間程度の学習を継続した。卒業研究のための看護研究法、国際保健、タイ王国の保健医療、HIV/AIDSに関する諸問題などを学習進度に合わせて内容を変え、ゼミナール形式で展開した。さらに、卒業研究を実施するための準備作業の一環として、実習で訪問する施設やタイ王国の保健医療事情、生活や文化などを紹介し、学生がより具体的なイメージをもって研究計画を作成し実習に臨めるようにした。

4年次になり卒業研究選択者以外の実習選択者が確定してからは、実習先で学生が行う卒業研究調査活動の確認や、実習日程と内容を提示しその詳細な活動についてレクチャーし、準備を促した。

4. 実習内容及び施設

1) 実習目的

2007年度、卒業研究に国際保健看護学を選択した学生の研究課題は、タイ王国におけるHIV/AIDSに関する内容であったため、研究課題に焦点をあてタイ王国での実習催行とした。さらに、北部タイ地域はHIV感染者が特に多く報告された地域であるため、感染予防や感染者への援助といった問題に対処するために、様々な施策や事業が国や県郡村、国内外の機関によって展開された。これまでの経験と共に、現在も継続的に、地域で生活する感染者への援助や、市民への健康教育などを行っている北部タイを実習の主な地域に選定した。

また、保健行政機関や様々なレベルの医療施設を訪問し、タイ王国の保健医療看護の実際を学ぶこととした。さらに、実習の全行程において、現地の食事を楽しみ、英語、時にはタイ語を駆使して人々とコミュニケーションをとることによって、自国以外の文化や習慣を、体験をもとにして学ぶことを奨め、差異（contrast）を考慮した国際看護の実践や異文化看護について考える機会とした。

2) 実習施設及び内容

実習施設は、タイ王国の HIV/AIDS 関連施設および保健医療、看護活動を学ぶことができる場である。以下にその詳細を紹介する。

(1) チェンマイ大学看護学部

チェンマイ大学は、タイ北部の古都チェンマイに位置し、北部タイを代表する高等教育機関である。文学部や工学部、農学部などもある国立総合大学で、医学部、看護学部、Associate Medical Sciences 学部などの保健医療関連学部も有する³⁾。

チェンマイ大学看護学部は、学生数 1300 名（院生含む）という大きな学部で、成人看護学や母子看護学、高齢者看護学などの各領域に分かれて教育を行っている。学部教育よりインターナショナルコースを開設しており、修士課程では看護管理、博士課程では各領域の教育を英語で受けることができる。特に、博士課程では 1 年間米国やカナダに滞在して看護研究法を学ぶことを義務付けており、国際的に活躍できる看護職の育成を目指している。そのため国外からの学生も多く受け入れており、ラオスや中国といった主に近隣諸国からの学生が多く留学し、チェンマイ大学で学んだ後は自国で看護教育や看護実践のリーダーとして活躍している。国際交流も活発で、日本、アメリカ、中国、韓国といった諸外国と交流を行っている。本学も 2008 年 3 月にチェンマイ大学看護学部との国際交流に関する覚書に調印し、現在では学生の交換交流や教員の学術交流などを行っている。

実習では、チェンマイ大学および看護学部の概要をまとめたビデオ鑑賞後、国際交流を担当する学部長補佐からチェンマイ大学看護学部の教育活動について講義を受けた。それを受けてチェンマイ大学教員とのディスカッションを行い、双方の看護教育に



写真 1 チェンマイ大学看護学部構内

ついて質疑応答形式で意見を交わした。さらに、看護学部学生活動を担当する教員より、学生の課外活動などに関する講義を受け、チェンマイ大学の特色である文化を大切にしている学生生活について学んだ。構内見学では、講義室、学生ドミトリ、カフェテリア、演習室等を見学した。構内には、緑豊かな広い中庭や大きな学生寮、コンビニエンスストアもあり、多くの学生はそこで共同して生活を送りながら学んでいる（写真 1）。また、演習室では、コンピューター制御による採血、静脈注射演習設備の体験や、教員の手作り教材など様々な工夫されている演習器材などを見学した。

(2) バーンロムサイ

バーンロムサイは 1999 年、チェンマイ郊外に日本人によって設立された HIV に母子感染した孤児たちの生活施設である⁴⁾。子どもたちの生活支援だけでなく、タイ王国および日本での HIV/AIDS の啓発活動や、HIV 感染女性へバーンロムサイのホームプロダクツの縫製を依頼することによって経済的に自立した生活を支援するなど、HIV/AIDS に関して多岐にわたり活動している。その資金は、援助や寄付のみに頼ることなく、バーンロムサイで作成したホームプロダクツや、子どもたちによる絵画を活かした葉書やノートの販売、ゲストハウスの運営などによって、バーンロムサイが将来的に自立して運営できるように様々な活動も行われている。

まずバーンロムサイの概要を知るためのビデオを鑑賞し、日本人ボランティアスタッフから活動の説

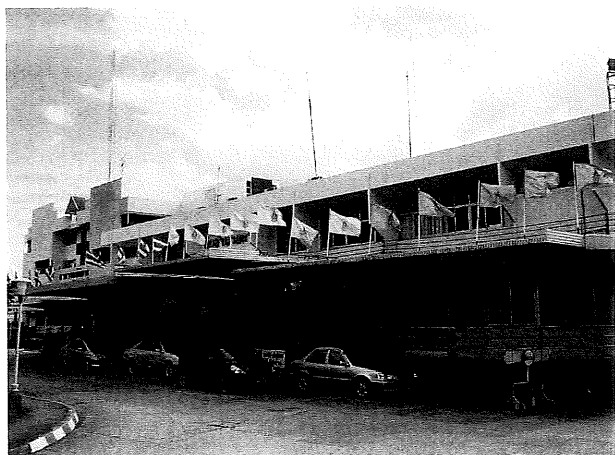


写真 2 パヤオ県病院正面入り口



写真 3 チュン郡病院外来待合室

明を受け、質疑応答、ディスカッションを行った。また、バーンロムサイは日本語でガジュマルの家という意味で、その語が示すとおり、敷地内には大きなガジュマルの木などの緑にあふれている。そこでの子どもたちの生活施設や、図書館、ホームプロダクトを作成する縫製場などを見学した。

(3) パヤオ県保健局

パヤオ県は、人口約 48 万人を有するタイ王国北部の県である。行政単位は階層的に、9 郡、68 地域、805 村に分かれる。県内に病院は 7 箇所、ヘルスセンターは 94 箇所、ヘルスポストは 14 箇所設置されており、パヤオ県保健局は保健行政を管轄する。保健局内は、AIDS 予防科、健康教育科、歯科保健科、疾病予防科、医療保険科、人材育成科など 9 つの科で構成され、県内の保健を統括している⁵⁾。

タイ王国の地方における保健行政の実際、特に HIV/AIDS に関する現状や政策、事業活動などの情報収集を行った。

(4) パヤオ（県）病院

パヤオ病院は 1957 年、タイ王国北部パヤオ県に設立された公立の県病院で、3 次医療を提供する総合病院である（写真 2）。病院の組織は、事務部、看護部、診療部、サービス改善部に分かれ、医師は 40 名、看護師は 400 名ほど勤務している。

実習では、小児外来、母子保健外来、成人・小児入院病棟、NICU、などを見学し、各部署の看護師と意見交換を行った。入院患者の傍らには多くの家族が面会しており、時にはベッドの上で患者と共に

くつろぎ、食事をし、語らう様子をみて、病棟看護師からホリスティックケアの重要性などタイ王国における看護観の説明を受けた。病棟の雰囲気や看護観の日本との違いに関して、実際の場を確認しながら説明を受けることで、学生は驚きながらも領くなど、理解を示していた。また、タイ王国では古式マッサージをはじめとした伝統医療が病院医療サービスの中に組み込まれており、市民も積極的に利用している。パヤオ病院も伝統医療科（外来）を院内に有し、古式マッサージの施術やハーブを用いた伝統的温罨法など、伝統医療と近代医療の共存の場を見学した。HIV/AIDS 関連では、病院敷地内の感染者のためのデイサービス施設を訪れ、そこでの Antiretroviral Therapy (ART) や保健指導などの活動の説明を受けた。

(5) チュン（郡）病院

チュン病院は 1982 年、パヤオ県中心部から 48km 離れたチュン郡に設立された公立の郡病院で、地域医療の中心となっている（写真 3）。病院は、事務科、薬剤科、看護科、検査科、社会医療科、計画科、タイ伝統医療科の 7 つの科で構成され、医師 2 名、看護師 46 名、その他の従業員約 40 名が勤務している。チュン病院は、1998 ～ 2003 年、国際協力機構によるタイ王国エイズ予防・地域ケアネットワークプロジェクトが展開された機関で、現在も、敷地内に併設されている People living with HIV/AIDS (PHA) を援助するデイケアセンターを中心に、HIV/AIDS に対する活動が活発に行われている。

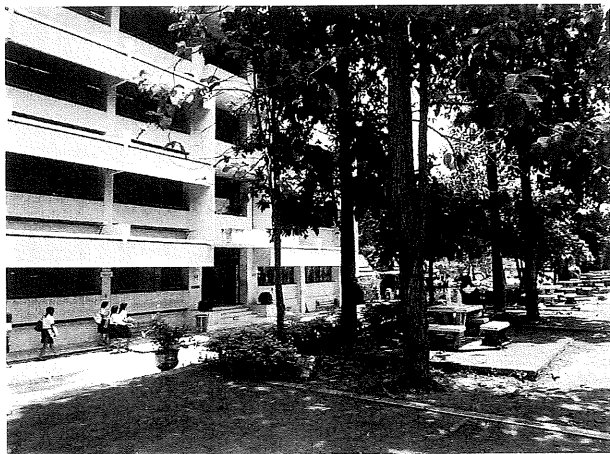


写真 4 パヤオテクニカルカレッジ構内

学生は、病院内を見学し、タイ王国の地域医療を学ぶとともに HIV/AIDS に関連した情報収集を行った。また、デイケアセンターでは、そこでボランティアとして活動する PHA と交流をもち、活動や生活の様子を直接聞いた。

(6) パヤオテクニカルカレッジ

卒業研究の情報収集およびタイ王国の教育を知ることが目的とし、パヤオテクニカルカレッジを訪れた。パヤオテクニカルカレッジは、約 3300 名の 15 ～ 22 歳の学生が職業技術を学ぶ公立高等教育機関である（写真 4）。教員は 150 名が在籍し、2つのキャンパスに分かれて教育を行っている。事務、コンピューター、自動車整備、電気、建設、会計、秘書、家政など職業従事に直接関連した内容を 11 科に分かれて学んでいる。

実習では、卒業研究に関連した情報収集に留まらず、年齢の近い両国の学生による意見交換の場を設け、直接コミュニケーションをとる機会をもった。

(7) バンコク病院メディカルセンター

バンコク病院グループは、東南アジアで最大の私立病院グループで、タイ王国に 17 院、カンボジアに 1 院を構える病院グループである⁶⁾。バンコク国際病院は、グループの中核となるバンコク病院メディカルセンターの中の 1 院で、日本人専門クリニックを開設しているなど、外国人患者に特化した医療サービスを提供する病院である⁷⁾。タイ王国には私立病院も多く存在するが、公立機関に比べて経済的な負担も大きい分、提供される医療やサービス

も充実している。バンコク国際病院は日本人などの外国人が多く利用するため、院内の案内板にはタイ語に英語、日本語が併記されているなどの工夫がされている。日本人専門クリニックには、日本語が堪能なタイ人医師や看護師、日本語による医療通訳が常時勤務してケアを行っており、タイ国内の日本人だけでなく近隣国に滞在する日本人も利用することがある。

実習では、院内施設、日本人専門クリニックや充実した設備の個室病棟などを見学し、国際看護の実践において重要事項となる、在外邦人の健康管理について学んだ。

5. 学生レポート

実習の総括として、学生は以下のようなレポートの作成を行った。

1) グループ課題

タイ王国について、(1) 文化、宗教、気候、生活等 (2) 保健医療システム (3) HIV/AIDS といった要点を含むレポートを実習選択学生全員で 1 編作成し、事前学習や実習中に実際に触れて学んだことを概観するものとした。

2) 個人課題

「異文化看護、国際看護とは」というテーマで、異文化や他国の保健医療事情にふれた国際看護実習を通して学んだことや文献等から、各自が考える異文化看護、国際看護について論じるものと、実習を通して感じたこと、印象に残ったこと、将来への展望等、自由に記述するものの 2 編とした。

Ⅲ. 考 察

2007 年度国際看護学実習は、学生の卒業研究課題を考慮して実習催行国や施設を選定した。北部タイは、タイ王国の中でも HIV 感染率が高い地域である。各医療施設での ART や保健指導などの HIV/AIDS に関する活動見学や、デイケアセンターにおける PHA との交流などを通して、自らが研究課題とした問題に直面している現場、人々に直接触れる機会を持ったことは、学生の学びに文献検討とは異なった具体性をもたせる助けとなったと考える。また、

様々な種類の保健医療施設や教育機関を見学し、そこで活動する現地の人々と十分な時間をとってディスカッションを行ったことにより、タイ王国の保健医療システムや状況を知った。特に看護活動の見学や看護師との交流では、病棟の雰囲気や看護観の違いに触れ、看護活動における異文化理解を学んだ。実習において、とても重要となったのはタイ語や現地の文化、習慣である。寺院や市場、食堂などを訪れて市民の生活に触れ、さらに直接人々と交流をもつことを積極的に奨めた。教員が介在せずに、学生が現地の人々とコミュニケーションをとる場面も多くみられ、学生が主体となって異文化を体験する機会をもつことができた。国際看護学の現地実習においては、異文化看護の理解をすすめるうえでも語学や文化についての事前学習に、さらに重点をおくべきだと考えられる。

看護教育の目標の1つは、世界の健康問題に対する学生の文化的感受性を高めることであり⁸⁾、そのような指摘からしても、外国で実際に触れ学ぶ国際看護学実習の果たす役割は大きい。学生の国際看護学への関心や異文化理解を定着させるために、実習後のフォローアップなどを検討していく必要がある。

IV. おわりに

2008年度は、タイ王国及びラオス人民民主共和国での国際看護学実習催行を予定している。ラオスでは、国立総合病院や郡病院など保健医療施設への訪問や村落での健康教育など保健医療施設、地域保健活動の見学や現地の看護師との交流、日本人による国際協力支援や国際看護・国際協力活動を学ぶことなどを計画している。また、HIV/AIDSに関

しては、学生の関心も高いため、経験が豊富で多くを学べるタイ王国での実習も継続していく。

謝 辞

実習にあたり、学生の学びに貴重な機会を与えてくださったタイ王国の実習協力施設の皆様、通訳、コーディネーターとしてサポートして下さった Ms.Kamonpan Inthoeng に深謝いたします。

なお、本報告の一部は国際看護研究会第11回学術集会(東京)で発表した。

文 献

- 1) 厚生労働省職業安定局外国人雇用対策課：日・インドネシア経済連携協定に基づくインドネシア人看護師・介護福祉士候補者の適正な受け入れについて。 <http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyou/other21/index.html>, 2008. 8. 21
- 2) 吉野純子：国際看護教育の現状と課題. インターナショナルナースingleビュー, 29(4)：20-22, 2006
- 3) チェンマイ大学ホームページ：<http://www.chiangmai.ac.th/>, 2008. 8. 21
- 4) バーンロムサイホームページ：<http://banromsai.jp/>, 2008. 8. 21
- 5) Phayao Provincial Health Office: Phayao Provincial Health Office Report 2007, 2007
- 6) ソムアツツウォンコムトオン、小杉未央：タイのメディカルツーリズム バンコク病院. 病院, 66(7)：568-572, 2007
- 7) 小林京子, 本田順子, 平谷優子, 他：タイの先端医療における病児とその家族へのサービスのあり方. 家族看護, 6(1)：144-149, 2008
- 8) 戸塚規子：国際看護学の展望. 看護教育, 38(12)：1032-1035, 1997